
魔獣使いは我が道を行く

睡蓮 鏡華と朽紫那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔獣使いは我が道を行く

【Nコード】

N8119X

【作者名】

睡蓮 鏡華と朽紫那

【あらすじ】

神崎玖惹は、いつものようにポケモンを売買している研究者達をばこぼこにしていたが、一人の研究者に銃で撃たれてしまう。一緒に戦っていた相棒達に分かれを告げ死んでしまい次に目覚めたときには、伝説のポケモン「アルセウス」に出会い転生の話を持ちかけそれを受け入れた。彼女は転生し「リボン」の世界へ…。

紹介（前書き）

リボンとポケモンのコラボはどうだろうと思いついてみました。

紹介

名前 神崎 玖惹

フリガナ カンザキ クジヤ

性別 女

年齢 ツナ達と同じ

身長 165センチ 体重 50キロ

一人称 私

誕生日 7月7日

性格 無表情がいつもの顔で、心を許した人にしか笑わない

髪の色 黒

目の色 青

髪型 ショートだが耳の部分だけ鎖骨ぐらいまでの長さ

着る服 白い服や、王冠の入ったプリントTシャツを好む。

必需品 モンスターボールに入ったポケモン

携帯 財布 ベージュのポーチ

備考

ポケモンと共にやってきた転生者

ポケモンを「家族」または「相棒」と呼び、傷つける輩やから
は容赦ない制裁を下す

また人と関わることを嫌う

そのため周りの人から孤立しがち

現在は並盛の廃屋に暮らしている

廃屋から並中まで十キロ離れたところにある。

（ちなみに学校へ登校する時はサーナイトのクレメンス
の持つ技「テレポート」で登校する）

一応武器はあるが、基本的に魔獣を使って戦う

一言

「私と関わるなら精神科へ行くことをお勧めするよ」

名前 清水 由香

フリガナ シミズ ユカ

性別 女

年齢 ツナ達と同じ

身長 152センチ 体重 49キロ

一人称 ウチ

誕生日 11月11日

性格 優しい

髪の色 黄色

目の色 茶色

髪型 ショート

着る服 水色やピンクといった服を着る

たまに奇抜な服を着る

必需品

代々清水家に伝わる短刀「雪羽」ゆきはね

携帯 財布

備考

トリップ者

裕福な家庭で育った

現在はマンションで独り暮らし

いる

神様からは治癒の能力と最強設定を特典としてもらって

一言

「私に嫌いな人なんていません。皆いい人なんです」

注意事項

・普通は4つの技しか使えませんが、この小説では秘伝技や技マシ
ンで覚えられる技を使います。

- ・レベルは無限大です。なので無限大に強くなります。
- 進化は主人公の見極め?となります。
- ・主人公は都合上6体以上のポケモンを使います。

紹介（後書き）

玖葱の手持ちポケモンはのちほど公開します。

とりあえず、私が実際に使っているポケモンと玖葱が使いそうなポケモンを出そうと思います。

〈質問コーナー〉

皆さまの好きなポケモンは何ですか？

私は、サザンドラとブラッキーにランターンなどが好きです。

ではまたいつか投稿をしたいと思います。

今いる世界にサヨナラを（前書き）

そう言えば伝え忘れがありました。

ポケモンは玖葱の使うポケモン（控え軍も合わせて15匹）

しか出てきません。

玖「すいませんね…作者がバカで」

…主人公こんなドSでしたっけ!?

玖「こんな作者はほっ」として本文をどうぞ」

今いる世界にサヨナラを

自分が、死ぬ時は誰かに殺されてしまっただろうと感じていた。

いや…病気で死ぬこともあっただろうが。

物心ついてから、私は悪さばかりしてきた。

人のポケモンを強奪、建物を自分のポケモンを使って破壊はもちろんのことで、

人に対しての暴言は毎日のこと。

だからこんな自分に友達はいないし、近づくことすらなかった。

だからこんな自分にもいつかは、天罰が下ると思っていた。

で、今私はその危機に直面している。

今日もいつも道理、自分のストレス解消のためにポケモン売買や虐待、

実験をしてるアジトに堂々と私の相棒達と正面から乗り込み研究者たちを制裁していた。

オリに入っていたポケモンたちを解放をしようとしたところで、まだ気絶していなかった研究者が…

銃で私の手持ちポケモンの一匹であるハピナスのアロエを撃とうとしていた。

それに気付いた私はアロエを押しつけ撃たれた…ッというわけで。

「ハピィッ！」

今、アロエに治療されているが傷口はなかなか消えないのが自分でもわかる。

「うるさい…もついいよ。直らないから」

「ピィー！」

嫌だとも言うようにやめようとしなない。

アロエの目からは大粒の涙がボロボロ私の腕に落ちる。

なんで私なんかのために泣くのか理解しがたいよ。

アロエのほかに、エネコとか、サザンドラのタナトスとか…

何でそんな泣きそうな顔で見るのさ。

「…泣くやつは…嫌い…だよ」

赤く染まった手でアロエの目を触ると、綺麗なピンクの肌が血で汚れてしまう。

「…私のために泣く奴はもつと嫌いだ」

ああ、もう眠い。

死ぬ時は走馬灯が見えるとかいうけど全くもって見えないし。

もう、耳まで遠くなってきた。

…でも、

「君達は相棒であり家族だから…特別に許してあげるよ」

私が初めて認めた相棒達よ。

「ごめんなさいは言えないけど、

「私は…幸せ…でした…！」

感謝だけはしてあげる。

今までこんな私といってくれてありがとう。

そして

サヨウナラ

私が最後に見たのはアロエとダークとエネコの泣く顔。

ああこれでいいや…次に会うことはないよね。

もう私を忘れて、幸せになってくれることを願うよ。

今いる世界にサヨナラを（後書き）

主人公は基本的、最終進化を遂げたポケモンにニックネームをつけます。

なので、文中に出たエネコは、名前はまだつけられていません。

初めまして、行ってきます

私が目を開いて思ったこと…。

何もない。

ただ真っ白な世界が広がっている。

何処を見ても、白、白、白。

もしかしてここは噂の死んだ人が来るところなのだろうか？

地獄？ それもあり得はしないけど天国？

『ここは異世界の狭間』

「は？」

頭の中で響く声。これは一部のポケモンが使えるテレパシーだ。

私の目の前が暗くなったので視線を上げると、

そこにいたのは細くしなやかな純白の身体、

宝石のようなパーツが埋め込まれた金属的な質感の装飾状部位は金色で、

たてがみ状のパーツが頭部にあり4足歩行で白馬を思わせるシルエットの姿を持つポケモン。

「伝説のポケモン様であるアルセウス様を拜める時が来るとは思いもせませんでしたよ」

『フフ…初めましてだ。 玖惹よ』

「あなたのようなポケモンがこんな私にどんな御用で？」

『玖惹よ、あなたは死んだのだ』

「…いきなり何？ そんなこと分かってるよ」

『そなたのおかげで組織が壊滅し事件は解決した。』

『そなたの犠牲とともに…』

「ふーん…で？」

『我はそなたを気に入っている。』

そなたが死んだとき我は悲しんだ』

「…一度ポケモン専用の眼科へ行けば？ それか精神科にいったいで」

話しが繋がっていないよ？

何が言いたいのかな？

『なあ、玖惹よ』

「何？」

『違う世界で生きなおさないか？』

「…は？」

このポケモンとんでもない爆弾を落としたよ。

「この私が？　生きなおす？　理由を聞かせてほしいな」

『我がそなたを気に入ったからだ』

そんな理由？つと言おうとしたがアルセウスはなかなか私から視線を外さない。

『我はそなただからこそ生きてほしいのだ』

私だからこそ？

「私だからこそ？　…でもさ私なんかを転生させても良いな訳？」

『問題ない、我は神の存在だから作るのも壊すのも我が決めること』

「じゃあ、私とその新しい世界でその世界を壊そうとするのなら？」

『そなたは、悪を壊しても世界を壊さない』

「知ってるような口ぶりだね」

『知っているからな』

アルセウスが笑っているように見える。

まるで、親友と話しているような気持ちになってくる。

…まあ、別に新しい世界で気ままに暮らすのも悪くないね。

「いいよ。貴方の願い聞きいれるよ」

『そうか。では特典も入れよう今頃アイツも説得をしているところだからな』

説得？ 誰を。まあ良いけど。

『さて…そろそろ別れの時だ』

「ふーん、じゃあまたいつか会えたらいいね」

『そうだな』

私の体がだんだんと透けて薄らいでいく。

どんな世界に行くか分からない。

どんな特典がつくかわからない…けど。

「ありがとう…アルセウス」

『そなたに数多くの幸があることを祈ろう』

まあそれなりに頑張って次の世界を、私なりに楽しんでくるよ。

起きたらそこは…

「…なにこのボロボロの状態」

目を開けると、視界に入ったのは荒れ果てた部屋。

窓は割れて破片がそこらに散らばっており、カーテンは破かれている。

テーブルはもちろん照明も粉々に砕けている。

無事なものと言えば、今自分が寝転んでいる黒い革製のソファだけ。

まさかアルセウス…転送する場所間違えた？

「…まあ、別に豪華な家に送られても迷惑なだけだし」

ゆっくり身体を起して体の動きを確認するとしよう。

指を動かし腰を捻る、立ち上がって屈伸。

で、首をバキバキと回す。

よし…死後硬直とかしてない。

服も血だらけになってない、ほつれも穴も空いてない…得した。

「完璧生前のまんまだね」

次は所持品の確認。

パーカーの内側にナイフが10本ある。

殺人鬼扱いしないでね。これはあくまでも護身用だから。

で、パーカーのポケットに財布と手帳。

所持金？ まあ大体10万ぐらい入っている。

手帳は、その日の日記を書いたりしている。

次に腰の方を触った時に気付いた。

「いつも」の感触が…ない。

ない…ボールホルダーが、モンスターボールがない。

相棒達がない。

とたんに体が凍りつくような感覚がする。

「…冗談きついよ、これ」

思わず両手で顔を覆う。

うん、悲しい。あいつらがいないとなんかさびしい。

「うめー…」

思わず涙をこぼしそうになった。

すると何かが私の目の前でガシャンと落ちる。

覆っていた手を離し、落ちてきたもを見てみると、

………えっ なになになに

目を見開き、思わず後ずさる。

「嘘…だって…ええ!？」

うまく言葉が出てこない。

だってそこにあるのは

私のモンスターボール。

とりあえず確認のため6個のモンスターボール全てを投げる。

「ギャオオ！」

「ミイー！」

「え、チヨ…ギャアアア！」

出てきたと共に、私に飛びついてくる顔なじみのある相棒達。

まずい…圧死を迎えそつだ。

「ハピッツ！」

「グルオオオ！」

ハピナスのアロエとトドグラが私の危険を感じ取ってくれたのか、

他の相棒達に離れるように指示する。

また、死ぬことになろうとしたよ…危ない危ない。

落ち着いたところで皆を見る。

皆泣き顔や心配顔でブツサイク。

うん、かなり不細工だ。

「酷い顔だ、ね」

思わず声が震える。

顔が熱くなり、涙が出てくる。

皆も不細工だけど、自分も不細工だ。

「特典って…これのこと、だったんだ」

もう、嬉し過ぎて…言葉が出ない。

気前がよすぎだよアルセウス。

「皆、大好きだ！」

その瞬間、また皆が泣きながら飛びついてくるが、

私もまた泣きながら私の「家族」を抱きしめた。

*

「…さて、涙も収まってきたしこれからの事を考えよう」

一番聞きたいのはここはどこなのかということ。

何かヒントになる物ないかなーっと思っていると、

「ミィ」

「…何、エネコ」

エネコが、紙切れを口でくわえている。

何、いつの間に？

そう思い紙切れを受け取って広げてみる。

『この手紙を見ていることはきっと無事に別の世界へ行けていることだろう。』

そなたの情報はすべて前の世界から引き継いである。

だから、そなたが情報屋として活動していたこともそのままだ。

そしてこの世界ではそなたの思っていることとは違つかもしれない。

ポケモンたちはきつと異端扱い、魔獣と呼ばれる可能性があるだろうがそなたなら大丈夫だ。

そなたを信じる「家族」と共にそなたの思う道を歩けばいい。

最後にこの世界でも学校はある。

そなたは中学生だから学校へ通う義務がある。

並盛という中学校だ。

読み終わったら今から行くように。

健闘を祈る』

パソコンで打たれたかのようにきつちりとした文字。

差出人は書かれてはいないが、私には分かっている。

紙切れを折りたたみ手帳にしまいこむ。

「学校ね」

まあ、中学生だけど前の世界不登校気味だったし。

いじめってというのは無かったけど、何か浮いた感じがしてたからな。

ま、いつか。

それに情報屋してたのも引き継がれたのか。

まあ、お金ないとこの廃墟に暮らせないからありがたい。

てかところどころで……、

「今何時？」

まだ7時ぐらいだよな。

「じゃあ、大丈夫か」

とりあえず、制服が何処にあるのか気になる。

「ハピ！」

「…何処にあったの？」

いつの間にかアロエが、制服を持っていた。

「まあ、いいや。ありがとう」

制服を受け取り着替え始める。

女子用だよもちろん。

何？

男子用じゃないのって…どこの男装少女だよ。

「じゃー行きますか。皆戻れ」

皆素直に元に戻るが、

「…」

「何？ 早く戻って。捨てるよ」

「…」

エネコだけは戻らずに私の足元によりすり寄る。

めんどくさいな。

「もういい…行くわ」

「ミィ」

あきらめて、エネコと共に学校へ行くことにする。

まあ、途中でどこかに隠して置いとくか、無理やりにも戻すけど。

起きたらそこは…（後書き）

ちなみに主人公は、リポーンを知りません。

所で何かおかしい部分がありますね。

主人公答えてください。

「紹介で学校に登校する時はテレポート使っんじゃないのって
質問が来そうだからこの場を借りて答えるよ。」

テレポートは一度来たことある場所に行けるからね。

並中はまだ行ってないからテレポートでいけないのさ」「

主人公ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119x/>

魔獣使いは我が道を行く

2011年10月26日13時11分発行